**平和統一運動次世代リーダー育成のための**

**「私から始まる平和統一大賞」青年スピーチ部門及びエッセイ応募原稿フォーマット**

**■「私から始まる平和統一大賞」とは**

　’為に生きる’神様主義の真の愛を根本精神として国籍と思想、組織を超越して、国内外の韓民族の和合と統一の実現を目指す平和統一聯合は、2024年より平和統一運動を同世代や後に続いていく世代の力とするために、この賞を創設いたしました。

**■今年の募集テーマは「ＳＮＳ（ソーシャル・ネットワーキング・サービス ）」**

SNS（Facebook、X、Instagram、Line、KakaoTalk、TikTok、YouTube など）を通じた在日同胞や海外同胞との出会いや体験。自分が携わってきたプロジェクトにSNSを活用して成功した事例や失敗。そして、そこから得られた教訓など、これらの事を通じて、今の時代に合う平和統一運動をどのようにしたらよいか、またどのような発信が良い影響をもたらすのかなど、様々なエピソードを募集いたします！

|  |  |
| --- | --- |
| 応募条件 | 平和統一聯合に所属している会員、担当者。または左記から紹介を受けた方。 |
| 募集期間 | **青年スピーチ部門：**募集日程及び大会日程は、ホームページ及び機関誌『平統解放』にてお知らせ致します。※ 第１連合会（北関東・東京・南関東）、第２連合会（北海道・東北）、第３連合会（東海、北信越）、第４連合会（近畿・中国・四国）、第５連合会（九州・沖縄）において、2025年6月15日（日）まで地方予選を行い、それぞれ代表１名を選抜し、本部に映像提出。**会員及び一般部門　エッセイ募集：**　2025年４月１日（火）～2025年６月15日（日） |
| スピーチ原稿規程 | **【青年スピーチ部門】**５分以上７分以内（制限時間を超過した場合は減点）。※パワーポイント使用可。**【会員及び一般部門　エッセイ募集】**800字以上3000字以内、１人１点。※両部門とも主となる言語を日本語で行うこと。部分的に韓国・朝鮮語、または他国の言語を使用しても良いが、日本語の意味を付け加えること。 |
| 応募方法 | Wordファイルのまま、応募フォームよりご応募ください。※ 青年スピーチ部門に応募の方も、同様に原稿を提出してください。郵送、FAXでのご応募はご遠慮いただいております。 |
| 発表 | 2025年６月下旬　ホームページにて公開。入賞者には、メールまたはお電話にて直接ご連絡をさしあげます。両部門の大賞受賞者は、７月４日東京都内の記念行事でスピーチします。その交通費は本部負担。 |

**題名：　共感のネットワークがつなぐ未来と平和**

**お名前：　文咲恵**

(下記より本文をご記入ください)

現代社会においてSNSは、単なる情報共有の道具を超えて、自己表現や共感の連鎖、記憶の継承を可能にする場として大きな役割を果たしている。私自身、日本と韓国の間にルーツを持つ人間として、そして在日コリアンのアイデンティティ研究者として、このSNSの力を強く実感する経験をしてきた。

　SNSを通してアイデンティティの発信に出会った最初の記憶は、大学時代に遡る。InstagramやYouTubeで、在日コリアンの若者たちが自身の国籍、名前、学校生活、就職などを介した壁にぶつかりながらも懸命に生きている姿を目にした。そのとき、胸を突かれるような衝撃とともに、どこか「自分が見つかった」ような感覚があった。彼らが語るひとつひとつの言葉に、自分自身の過去が重なった。

　私は、いわゆる「日韓ハーフ」として韓国に生まれ、その後日本に移住し、以来19年間日本に暮らし続けている。日本に来て間もないとき、私は学校の中で韓国から来た「特別な存在」として配慮を受けた。 先生やクラスメイトの温かな対応はありがたいものであったが、その配慮は同時に、私自身に「他者」としての意識を深く刻み込むことにもつながった。そして次第に韓国人としてのアイデンティティは強まりを見せていった。

日本で生活を重ねながら、日本の社会にも文化にもどんどん染まっていった。日本語を使いこなし、日本人の友人と交遊し、日本式の教育を受けた。日常的に接する日本社会に対して居心地の良さを感じる瞬間も確かにあった。しかしその「馴染み」とは裏腹に、日本人としてのアイデンティティはなかなか根づかず、どこか曖昧で不安定な自分の立場に、もどかしさと孤独を覚えることが少なくなかった。ほとんど「日本人」と変わりない自分の姿と、それに反する「非日本人」アイデンティティ――。私にとって、このように内外が「噛み合わない」自分とは一体何者なのかを言語化することはなかなか難しいことであった。だからこそ、SNSで在日コリアンの若者たちが自分自身の言葉で葛藤を語り、語ることで人々とつながり、癒されていく姿に出会ったとき、それはまさに自分に向けられた言葉のように感じられた。

　そのような経験をきっかけに、私は在日コリアンのアイデンティティ問題に強い関心を抱くようになり、大学院に進学して若者世代における民族教育とアイデンティティ形成の関係性について本格的に研究を進めることとなった。研究成果の一端を講演という形で発表した際、その映像がYouTubeに公開されると、多くの在日コリアンや日本人から多くの反響が寄せられた。「在日コリアンの若者を初めてこういう視点で見た」「自分自身の在日経験が整理された気がした」という感想の数々に、私は静かに驚き、そして深く励まされた。

　自分の語りや研究が、誰かの視野を少しでも拓くきっかけになったのかもしれない——―そう思えたとき、私は次第に「語ること」への責任感も感じるようになった。それは、自分のためだけでなく、まだ言葉にできないでいる多くの人々の声をすくい上げ、共有していく営みであるという実感だった。

　研究を進めるうちに、在日コリアン社会における諸問題の深層には、朝鮮半島の分断という歴史的かつ構造的な要因が根強く存在していることにも気づかされた。在日のアイデンティティや民族的帰属のあり方は、単なる個人の選択や文化的な志向性にとどまらず、「南」と「北」という国家的な対立の延長線上に置かれてきた現実がある。それに気づいた私は、自然と朝鮮半島の南北問題にも視野を広げるようになった。

そうした問題意識から、私は日本・大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国の三国関係の視点から南北問題を捉え直す新聞記事を執筆・寄稿した。そこでは、冷戦体制下の歴史や、文化・メディアを通じた越境的影響、そして統一の可能性を考える上でのカギについて考察した。この記事の内容を自身のInstagramでも発信したところ、特に日本の若者を中心に想像以上の多様な反応が寄せられた。「南北問題を日本・韓国・共和国の三者関係で見たことがなかったから視野が広がった」「日本人の自分も南北問題に無関係ではないことに気付かされた」 といった声は、私にとって大きな意味をもって響いた。

私は、こうした声に感激すると同時に、不思議なほど深い充足感を覚えた。自分の言葉が、たしかに他者の思考や感受性に届いているという感覚。それは、かつての自分が「語ること」をためらっていた日々を越えて、いま語る者として新たな責任を背負い始めた証でもあった。自分の経験や言葉が、誰かの理解や共感のきっかけになるかもしれない。そう思えるようになったのは、まさにSNSという空間の中で、共鳴が起きる瞬間を幾度も目にしたからである。私は研究者である以前に、一人の「語る主体」として、そしてその語りに耳を傾けてきた「聞き手」として、SNSにおける語りの力を信じている。

　もちろん、SNSには困難や限界もある。発信内容が誤解を生んだり、「ステレオタイプ」として消費されることもある。SNSはときに断絶を生むが、それでもなお発信を続ける意義は、「見えない声」に光を当て、それが誰かにとっての共感を生み出すことで、また新たな声へと光が当てられ、連鎖的に共感のネットワークが生まれることにあると考える。

　最後に、SNSと平和統一運動との関係について述べたい。SNSは「声なき声」を可視化し、共感のネットワークを広げるメディアである。統一の実現には、政治的交渉や経済的統合といった構造的アプローチだけでなく、人びとの意識の変革と相互理解の積み重ねが不可欠である。SNSはまさに、その「積み重ね」を可能にする最前線にある。私たち若い世代が、自らの経験と感情を言語化し、発信し、受け止め合う中で、「南」と「北」、「日本」と「韓国」、そして「在日」と「本国」との間にある見えない壁を少しずつ取り払っていけるのではないか。

　「私から始まる平和統一」というテーマのもと、私はSNSを通して他者とつながり、自らの声を届けることで、小さな一歩を踏み出している。それは決して大きな運動ではないかもしれない。だが、アイデンティティの語りが共感を呼び、共感がつながりとなり、つながりが希望を生む——そのような希望の回路を、SNSという現代の「場」でつくり続けていきたいと思っている。